

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.015-

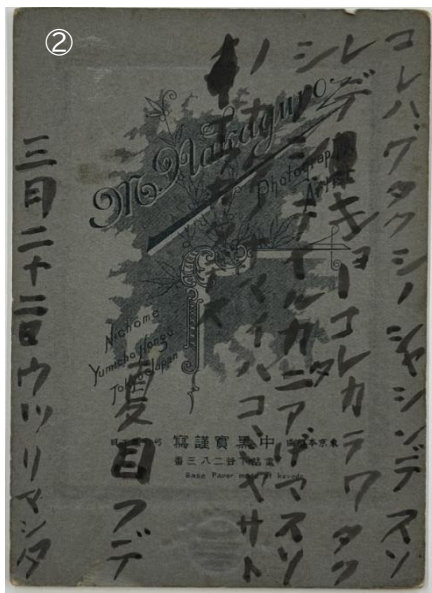
博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介しますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名：幼少期の夏目筆子(漱石の長女)の写真 ■資料のひとこと PR：小宮豊隆へ淡い恋心？を抱く筆子

■資料写真：①夏目筆子写真(表) ②筆子写真の裏に書かれた自筆文字(裏)



資料翻刻

これは、わたくしの写真です。
それで今日、これから私の知っている方にあげます。
その方の名前は小宮さんという方です。
三月二十二日写りました
夏目 フデ

＊ついでのひとくちメモ＊

夏目漱石長女フデ(筆)は漱石が熊本第五高等学校で教鞭をとっている明治32年5月、熊本で生まれました。妻の鏡子が字が下手だったので、字が上手な子になるように願って、漱石は「筆」と名付けたとか。次に生まれた娘には、漱石は「長女が筆だからスミ(墨)にしたらどうか」と言ったそうですが、実際はツネ(恒)と名づけられました。

■資料データ File

- ・形状／材質／法量：台紙貼付写真 タテ 12.9 cm×ヨコ 8.9 cm
- ・制作年代：明治39年～41年ごろ
- ・注目ポイント：きゃっきゃと喜んで書いた筆子の想いがカナ文字にあられ、それを見た青年豊隆が筆子に微笑む顔が浮かびます。

■資料メモ

小宮豊隆は明治38年に漱石と出会い、翌39年には漱石宅での木曜会が始まります。明治41年、漱石42歳、奥さん32歳、筆子10歳、豊隆24歳、彼の日記には木曜会に限らずしょっちゅう「先生のうちにいく」と書かれています。筆子は弟子の間で「お嬢」と呼ばれ、幼い筆子にとっては、その中でも豊隆はいつもお父さんのところにいるお兄ちゃん的な存在だったと思われます。母・鏡子と筆子は豊隆の下宿に来ては一緒に活動(映画)に行ったり、外で食事をしたり、時に筆子は帰りの人力車の中で豊隆に抱かれたまま眠ったり。鏡子からも「筆はあなたのことが好きなんだから、筆が大きくならないうちにお嫁さんをもらってください。さうしないとあの子が可哀そうだから」とも言われています。

写真の筆は、小学1,2年生くらいでしょうか。手には大輪の花を持ち、髪を綺麗に整えた澄まし顔の少女。裏面には上記の言葉が書かれています。ちょっとおませな筆子がお気に入りの写真を手にして、「私のこの写真、小宮さんにあげる！」と覚えてたのかナ文字を書いて、いつもそこにいる豊隆に筆子はちょっとはにかみながら手渡したことでしょう。

■整理担当者のつぶやき

少女筆子にとって、家にいつもいて、幼いころから師匠の娘の自分に優しく大切に接してくれる豊隆は、もしかしたら初恋の相手だったかもしれません。5月に豊隆が九州に帰省するとき筆子は「私の誕生日までには帰ってきてね！」と言ったとか。ああ、その帰省で豊隆は同郷の高山恒(くしくも妹と同じ名前!)との結婚を決めて帰ってきたのでした。

注) 1. 本文作成にあたっては、以下の資料を参考にさせていただきました。

・漱石襟記(角川書店) ・漱石 寅彦 三重吉(角川書店) とともに小宮豊隆著 「日記の中から」より

2. 本文の情報は令和8年1月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。

3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。

編集・発行：みやこ町歴史民俗博物館/2026